
秀梅の瑕

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秀梅の瑕

【Nコード】

N8050N

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

真国の将、郭玄偉は王の命により亡国の王女臨秀梅を花嫁に迎える。臣下に嫁ぐくらいならばと多くの亡国の王女が死を選ぶ中、秀梅が自らの国を滅ぼした国の軍人である郭玄偉の妻となることを選んだのは何故か。

作者別作品「木蘭の涙」番外編。

三人目の花嫁 一（前書き）

作者別作品「木蘭の涙」番外編です。

木蘭の涙と同じ時代・同じ国を舞台としておりますが、数年程未来の物語になります。

全く別の物語として読んでいただいて差し支えございません。

三人目の花嫁 一

生まれながらに持つ傷は、前世での罪の証だという。
ならば生を受ける前、私は一体何の罪を犯したのだろう。

誰か教えてほしい。

何を償えばこの傷が癒えるのか。消えるのか。

それとも今生きていること、そのものが、贖いなのだろうか。

少し、飲みすぎた。

郭玄偉は水差しから水を杯に注ぎ、一息に飲み干した。

酒のせいで乾く喉はそれでもまだ熱い。

注がれるままに杯を空けていたから、普段の量を随分過ごしてしまった。

しかし今宵の宴は郭玄偉の婚礼を祝うもの。飲まされるのは仕方が無いことであった。

大きく息を吐くと、婚礼衣装の上衣を脱ぎ捨てる。

飾り房や刺繍が施された上衣はかなり重量があり、式の最中から肩が凝ってたまらなかった。

いつも身に付けている甲冑であったならその重さなど全く気にならないのに、

絹独特の纏わりつくような重さにはどうにも慣れない。

そのまま衣装を全て脱ぎ、いつも身につけているものと同じ簡素な麻の寝巻を羽織る。

汗ばんだ肌をさらりと覆うその感触に少し心が落ち着いた。

前を合わせ帯を締めようとして、どうせすぐにこの寝巻も脱がなくてはならないことに思い至り苦笑する。

婚礼の夜。妻を迎えた男の義務が待っている。

飲みすぎたのは、気が重かったせいもあつたかもしれない。

彼の妻となつたのは臨国王女りんしゅうばい臨秀梅。

しかし彼女の国は半年前郭玄偉が仕える国、真によって滅ぼされていたから、

元王女といった方がいかもしれない。

半年前から無いに等しいものではあつたが郭玄偉の妻となつたことで、

彼女の王族としての身分は正式に失われた。

郭玄偉は真国において代々宰相を勤める郭家の出身である。

真国王の姻戚であり国内では最も力のある一族ではあつたが、

郭玄偉は傍系で本来であれば亡国の王女とはいえ王族を妻に迎えることができる身分ではない。

亡国の王族は男であれば皆殺しにされ、女であれば侵略者の後宮に放り込まれ、子を産まされる。

そうすることで、王家の血を勝者の者に塗り替えていくのだ。

しかし大陸の多くの国とは異なり、真国は一夫一妻制である。

それは王族も例外ではなく、現真国王は数年前に東の端の国の王女を娶り、他の女には目もくれない。

そのため真国において滅ぼした国の王女は王のものとされず、手柄を立てた者への褒賞として与えられるものあつた。

しかし臣下との婚姻は、王族という生まれながらにして持つ身分を奪う。

故にほとんどの女性王族は王族のまま最期を迎えることを望む。すなわち高貴な身分のままの死か、生涯に渡る幽閉か。臨の女性王族も同じ選択をした。ただ一人を除いて。

今日彼の妻となった王女だけが、自らの国を滅ぼした侵略者の臣下の妻となることを了承したのである。

「面倒だ……」

それが郭玄偉の偽らざる本心であった。

実は彼がこうして亡国の王女と結婚するのはこれが3度目なのだ。

最初の結婚相手は初めての夜、寝所で舌を噛んで死んだ。

2人目の結婚相手は婚礼の当日、顔を合わせた途端簪で喉を突いて死んだ。

3人の王女を与えられる程、郭玄偉の軍人としての能力は真国内においても突出していた。

そのため若干28歳にして將軍と呼ばれる地位にいる。

死ぬほど嫌ならば最初から俺と結婚するなどと、了承しなければいいのに。

軍人として戦場にある者として、どんな惨たらしい死体だろうと最早何の感情も呼び起こしはしないが、目の前で物言わぬ肉の塊となった王女たちの姿は、いつも複雑な気分させられる。

しかし王からの下賜品として与えられる花嫁を郭玄偉から拒めるはずもなく。

郭玄偉の妻となった16歳の王女は、寝所で静かに夫を待っている。

郭玄偉はまた大きく息を吐くと寝巻の帯を締め、姿を整え寝所へ通じる扉を開いた。

三人目の花嫁 一（後書き）

この物語で臨秀梅がどうして真国王に忠誠の証を立てることができなかったかを語る予定。

そんなに長い物語にはならないと思います。

三人目の花嫁 二

寝室は芳しい花の香りで満たされていた。確か心を落ち着かせる効果があるという香り。

ただ酔いが回り始めた郭玄偉には少し、強すぎる。いつも気を利かせすぎる侍女たちの仕業であろう。

しかし今夜は咎める気にはなれない。

穏便に、無事に、事が成されればいいと郭玄偉も思っている。

誰だつてせつかく迎えた花嫁を死なせたいわけではない。

何しろ物言わぬ骸となった花嫁をどうにかするのは彼女たちの仕事なのだ。

寝台の側に置かれた蠟燭の灯りが、部屋をぼんやりと照らしている。その寝台の端に、花嫁は扉に背を向けて座っていた。

湯を使ったのであろう。結い上げられていた髪は下ろされ、豪奢な花嫁衣裳ではなく絹の寝巻姿。

呼びかけようとして、それが顔を合わせてから始めてであったことに気づく。

名で呼べばいいのか、それとも、姫様とでも呼べばいいのか。

面倒くさい、という気持ちがまた頭をもたげてくる。

こんなことなら、もっと若いうちにさっさと結婚しておけばよかった。

真国の將軍という地位にありながら妻帯していないのは郭玄偉のみ。そもそも結婚適齢期は15歳から18歳。

身代を整えることが難しい貧しい者でもなければ、せいぜい20代前半までには結婚する。

亡国の王女を迎えるまでに、縁談は何度かあった。

傍系とはいえ名門郭家の出。さらに軍で王の覚えもめでたいとあれば、

話だけなら幾らでもあったのだ。

しかし話が纏まらなかったのは、郭玄偉のごく個人的な理由。

王女様なんかを王から押し付けられさえしなければ、多分一生結婚などしなかった。

郭玄偉は思わず頭を掻き毟っていた。ごちゃごちゃ難しく考えすぎた。

すでに手続きは済んだ。臨秀梅は正式に郭玄偉の妻である。ならば自分の好きに呼んでいいはずだ。

「秀梅」

名を呼ぶと、ゆっくりと振り返る。

「はい」

応えた声は意外にしっかりとしていた。

大陸の山岳民族によく見られる、栗色の髪と瞳に乳白色の肌。

宴では気づかなかったが揺れる灯りに照らされた頬にはそばかすが散っていた。

16歳といえば結婚適齢期であるが丸みのある頬に、女になりきれないまだ青い雰囲気が残る。

真国において初夜の花嫁の装いである、特別な紅が口元を彩っている。

この唇を見るのは、3度目だ。

普通の男であれば、一生に一度しか見ない特別なものののに。

哀れな哀れな、亡国の王女。己の国を滅ぼした国の、王族ではなく臣下と娶わせられる。

何かの舞踊の題材にでもなりそうな、陳腐な筋書き。

実際に国外では耳にしたことがある。王女には他に想う人がいた、なんて装飾付きで。

この姫も本当の夫婦になったら
郭玄偉と肌を合わせたら、
死を選ぶのだろうか。

三人目の花嫁 二（後書き）

次から15歳未満はご遠慮下さい的な展開になる予定です。

本編の二人は全くそういう雰囲気じゃないのに番外編は展開早いな
と書いてて思います。

三人目の花嫁 三

触れただけで折れそうな華奢な肩にそつと手を置くと、びっくり、と秀梅は身を強張らせた。

婚礼の日に初めて顔を会わせた男に触れられれば、脅えるのも無理は無い。

ただどんなに脅えられようが、嫌がろうが、暴れようが、止めるつもりは毛頭ない。

亡国の王女の純潔を奪うことは、郭玄偉にとって王から命じられた義務である。

少なくとも孕むまでは寢室を共にすることになるだろう。

臨国は最後の最後まで抵抗した。

その分早い段階で降伏したり、当初から戦うことを放棄して属国となる道を選んだ国よりも王族の扱いは厳しい。

戦の責任は、戦った者たちの命の代償は負けた側が支払わなければならない。

秀梅以外の臨国王族はすでにこの世にはない。

もう秀梅に帰る場所も抛り所になる血族も存在しない。

今肩に触れられただけで身を硬くしている少女は、

ただ死ぬのが嫌で敵の妻となるほど強かだとは思えない。

ではなぜ。

祖国を、家族を死に追いやった男の妻になろうというのか。
何度も繰り返した問いがまた蘇る。

ああ、面倒だ。

郭玄偉は肩に触れた手を離してガリガリと頭をかいた。

秀梅は戸惑うようにこちらを見ている。

ただ視線を合わせようとは、しない。

「秀梅」

もう一度、名を呼ぶ。

「はい」

答えは簡潔で、だけれど身体と同じように先程よりもわずかに硬さを含んでいる。

「お前が嫌だといっても、拒んでも、俺は止めぬ」

「……はい」

16歳であれば、この言葉の意味は理解できたはず。

確認というか、宣言はした。

そして花嫁は異を唱えなかった。ならばもういいだろう。

郭玄偉は手を伸ばした。

今度は肩を抱くためではなく、丸みを残した頬に触れるために、掌で包み込むように撫で、顎を引き上げるとやっと視線が合う。栗色の澄んだ瞳には、まるで鏡のように郭玄偉が映っていた。

「目を閉じろ」

「はい」

優しくしてやれるほど、この花嫁には感情が無い。
だからいつも通り、奪うだけだ。

郭玄偉は？み付くように秀梅に口づけた。

唇を舐め、齒をこじ開け、口腔を蹂躪する。

反射的に身を引こうとするのをもう一方の手で後頭部を掴んで引き寄せた。

激しく唇を貪りながら秀梅の寝巻の帯に手をかけると。

「嫌っ……」

初めて花嫁は拒絶の言葉を口にした。

逃げるように郭玄偉の胸に両手をつ突っ張って身を離そうとする。

唇を離すと郭玄偉は舌打ちして簡単に拒絶を封じた。

「聞かぬといった」

すでに婚礼の儀は滞りなく済まされた。

今でもいつかでも、秀梅は郭玄偉を受け入れなくてはならない。

「ち、違います……。するのが、嫌なのでは、ないっ」

「では何だ」

「灯りを、消して……」

「それではお前が見えない」

「では……どうか衣を脱がせないでくださいませ。…これ以外は望みませぬ」

このくらいの我儘は、許容範囲であろう。

郭玄偉は帯をほどくのを諦め、寝巻の合わせの隙間から手を差し入れた。

三人目の花嫁 三（後書き）

ちよこつと加筆しました。

初めての夜 一

その手は何の遠慮なく秀梅の肌を滑り柔らかなふくらみを掴んだ。感触を楽しむように揉むというよりは揺らすように弄ぶ。

男の手で触られているということよりも、

ざらりとしたその手の感触に秀梅はびくりと身を震わせた。

身の回りの世話を全て他人の手に委ねている王女の常として、誰かに触れられることは特別なことではない。

ただそれは女に限った話であり、夫となった人の手は秀梅の知るものとは明らかに違った。

やすりのように硬くささくれ立ったその手は秀梅の肌をざらりざらりと滑ってゆく。

その刺激が秀梅を戸惑わせる。

やがてふくらみを弄ぶのに飽きたのか、指はふくらみの小さな頂きに触れた。

「ああっ……」

思わず声が漏れる。

ざらりとした手の感触は肌の上であれば些細な刺激であつたのに、頂きに触れた途端、

その刺激は何倍にもなった。

秀梅の声に促されるように今度は頂きを弄られる。

輪郭に沿って円を描くように縁ふちを撫で先端を指の腹で摘み撫でる。

刺激は今まで一度も味わったことのない感覚で、ぞくりと背筋に悪寒が走った。

ふいに強く掴まれていた腕を解放されて、身体の均衡を失い
秀梅は腰かけていた寝台へ仰向けに倒れ込んだ。

身を起こそうと肘をついた時、初めて郭玄偉と真正面で向き合っていたことに気づいた。

郭玄偉の口元は秀梅のつけていた紅で汚れていた。

それを拭うように舌舐めずりをすると、勢いよく帯を解き、自らの寝巻を剥いだ。

思えば秀梅は男の裸など見るのは初めてだった。

婚礼衣装を纏った郭玄偉の姿は真国最年少の將軍に相応しい迫力に満ちていた。

若さと自信に裏付けられた生命力にあふれていたのだ。

それが違う意味で秀梅に迫る。

筋肉で武装された肉体は美しく引き締まり、それを彩るものは引き
攣れた幾つもの傷痕。

熱を発しているかのように、背中からは陽炎のようなものさえ見え
た。

大きな鉤鼻にも何かの傷痕。

半月型をした黒目が上に偏った鋭い目はまっすぐに秀梅を見つめて
いる。

薄い唇には真っ赤な、紅。

獲物を前にした、獣のような視線に先ほどとは違う悪寒が背中を走
る。

例えるならばそれは畏れと恐怖。

夫は止めないと言った。どんなに嫌と言っても拒んでも。だから逃げるつもりなんて無かった。

しかし本能的な恐怖を拭うことはどうしても出来ない。

秀梅は郭玄偉と距離を取るようじりじりと寝台の上を後退した。あつという間に、逃げ場は無くなる。

震えも、止まらない。

「逃げるな」

郭玄偉はあつという間に距離を詰めると震える秀梅身体を掴んで寝台の上につつ伏せに投げ出した。

「怖ければ、目を瞑っている」

初めての夜 ―（後書き）

この続きはムーンライトノベルズで。

初めての夜 二

破瓜の痛みがそうさせたのか、意識を失うように秀梅は眠りについた。

秀梅は確かに行為そのものは拒絶しなかった。

ただ与えられる行為に、初めて目の当たりにした男という生き物に怯えただけ。

それとも、男ではなく、郭玄偉に脅えたのか。

己が女に好かれる容姿をしているとは郭玄偉は全く思っていない。赤い髪に浅黒い肌。全身に散らばる引き攣れた無数の傷跡。

とがった顎をもつ顔には大きな鉤鼻に鋭く光る三白眼。

なまじ身長があるが故にひととき目立つ赤い髪から、

戦場でつけられたふたつ名は「赤鬼」。

容姿は郭玄偉の縁談がなかなか整わなかった理由のひとつである。結婚適齢期に差しかかるずっと前に彼は自ら女性を選ぶことを諦めていた。

肌蹴た寝巻を調べて、その顔に幾筋が残る涙の跡と貪りつくした唇に残る紅を親指の腹で拭ってやる。

なるべく痛みは与えないようにと気をつけはしたけれど、優しく、慈しんだとはとても言えない。

何しろ郭玄偉の女性経験は玄人の如き寡婦たちや、商売女に限られる。

だから今まで優しくする必要は全く無かった。

優しくしたいと思わせてくれるような女にもまた、巡り会わなかった。

男には女の初めての痛みはわからない。

以前冗談めかして商売女に尋ねてみたことがある。

二胡を奏でるのが、上手い女だった。

「そんな大昔の話なんぞ覚えちゃいませんよう」

特に私みたいな女はね。鮮やかに紅が引かれた口元を歪めて彼女は嘲笑った。

「ただね、女の初めては旦那さん方とは全く違うものだ」と

お思いになった方がよろしいでしょうねえ。痛みだけじゃなくて、女の身体には初めての男とのそれが否応無しに刻まれちまうんですよう」

刻まれたのがね、女の人生決めちまうんです。そう呟きながらどこか遠い目をした女。

拭っても紅はなかなか消えてくれない。

紅い紅いそれは女の言葉を思い出させる。

秀梅には何が刻まれたのだろう。

経験の無い女を面倒だと思うのは、女の言葉のせいもあるのかもしれない。

閨の戯れに聞いた嘘か真かわからぬ一言であるというのに。

ひとつ大きく息を吐くと、脱ぎ捨てた寝巻を羽織り帯を締めた。

裸で眠るのは落ち着かないし、この傷だらけの身体は顔と同じように醜い。

眠る秀梅を抱きかかえると、一緒に寝台に横になり掛布をかぶる。

呼吸に合わせて震える秀梅のまつげはまだ涙の雫に濡れている。

早く。

早く孕めばいい。

子供さえ出来れば、この亡国の王女につけられた枷のひとつは確実に外れる。

そして死なないでいて欲しい。自ら命を絶たないで欲しい。少なくとも、郭玄偉の目の前では。もう、花嫁の軀は見たくない。

軍人らしからぬ願いが過る。

西の赤鬼のふたつ名を背負う男の願い。

心を通わせたり、好かれたりしたいなどとは願わない。ただそこに在り、子を産んでくれれば、それだけで、いい。

郭玄偉は秀梅の己の背中を腹に当て、包み込むように抱きしめ、目を閉じた。

初めての夜 二（後書き）

好かれないなら優しくすりやいいのにねえ。
やっぱり私の書く男性キャラはみんなヘタレだ…。

夜明け前 一

郭玄偉の腕の中で穏やかな寝息を立てていたはずの花嫁が不意に身を掀つたのは夜明け前だった。

明らかに意識を持ったその動きに、郭玄偉の意識もまたすぐさま覚醒した。

長い間昼も夜も無い戦いの只中に生きてきた者として、わずかな異変でも見逃せば命に関わる。

しかし目を閉じたまま郭玄偉は何もせず秀梅の行動を観察した。

秀梅は自分を閉じ込めている郭玄偉の腕から逃れ寝台から起き上がった。

そして寝台の脇に置かれた箆笥から何かを持ちだすと、音を立てないようにであろう、

裸足で寝室から抜け出した。

逃げ出したか。

なるほど、ただの大人しい姫というわけではないらしい。

しかし賢くはないようだ。

初夜ということで、新婚の二人の寝室の周囲は念入りに人払いされているが、

屋敷を出ようとすれば警備の者はすぐに気づく。

仮にも郭玄偉は一国の軍隊の頂点近くにいる人間である。

今まで殺してきた人間の数は直接その手にかけた者だけでも数百は下らない。

その数だけ郭玄偉個人を恨む人間も存在する。

寝首をかかれるのは御免であったから、屋敷の警備はかなり厳重に

してある。

さらに亡国の王女を娶ったことで、より警備の必要性は高まった。

臨国が滅んでまだ半年。そこにただ一人残された王族。

いくら完膚無きまでに国としての形を破壊し尽くしても、民の意識を変えるには時間がかかる。

残された王女を担ぎあげ真国へ反旗を翻そうという輩がいる可能性はまだ否定できない。

だから早く秀梅には郭玄偉の、真国の男の子供を産んでももらわなくてはならないのだ。

不思議なもので夫婦となり子供を産んでしまえば、その女は夫のものになってしまったと世間は見る。

臨国の王女が名実共に真国の將軍のものとなる。

それは真国が完全に臨国を支配したという象徴となるのだ。

故に死以外で王女を失えば、郭玄偉は相当の責任を負わなくてはならない。

このまま放置しておいても秀梅が警備の人間に確保されるのも時間の問題であった。

しかし警備の人間が逃げ出した花嫁を見つければ大騒ぎになるだろう。

邸内には婚礼の儀式の招待客も何人が宿泊している。騒げば王宮まで話は伝わる。

そして郭玄偉も秀梅に何らかの罰を与えなくてはならなくなる。それは面倒だった。

まだ邸内は静まり返ったまま。

ひとつ大きく息を吐くと、郭玄偉は秀梅を連れ戻すべく寝台から起き上がった。

上着を羽織るといつも携帯している剣を持ち寝室を出る。

廊下に出ると夜のひやりとした空気が肌を撫でた。

月が沈み朝日が昇るまでの時間は一日で最も気温が下がる時間帯だ。こんな時間に寝巻姿で逃亡とは。その浅はかさのため息しか出ない。

それほどまでに、郭玄偉の妻となることは苦痛であったのだろうか。ならばなぜこの婚姻を承諾したのだろう。

堂々巡りの問いがまた、頭を過る。

探すまでもなくすぐに秀梅の姿は見つかった。

寝室からさほど離れていない庭園の池の傍に佇んでいたのである。

屋敷の中で唯一自然に湧き出る水から作られた池で、その清水はいつも冷たく、

暑く水の少ない季節には涼を求める者たちの憩いの場となっていた。

しかしすでに夏は終り、季節は秋から冬に差し掛かろうとしている。乾いてただ冷えていくばかりの今の季節、寝巻姿で涼むのはおかしい。

誰かと落ち合う予定でもあるのか。

秀梅が持つことを許された臨国の従者は侍女2人のみ。

それ以外の者は皆、処分されたはずである。

だが今宵侍女たちは寝室からかなり離れた場所にいるはずである。

周囲を伺い気配を消し様子を見てみると、秀梅は思いもよらない行動に出た。

両手のひらを固く握りしめると自らの腹を殴り始めたのだ。
どん、どん、どん、どん……。
鈍く肉を叩く音が、冷たい空気の中に響く。

夜明け前 二

一体何をしているのか。

郭玄偉はあつけにとられ秀梅の自傷行為を見ていた。

苦痛に顔を歪めながらも、秀梅は自らの腹を殴ることを止めない。
大きく振りかぶって拳を腹に叩きつけると、耐えきれなくなったのか膝が抜けたようにその場にしゃがみこんだ。

薄い絹の寝巻に、散った血の跡が目に入る。

愚かな自傷行為の意味に思い至ると、一瞬、例えようも無い怒りがこみ上げた。

しかし次の瞬間、怒りを凌駕したのは悲しみだった。

交わりをもったとはいえ、すぐに子供が腹に宿るわけではないのに。
秀梅は、郭玄偉の子供を殺すために、己の身体を傷つけているのだ。

ではなぜ。

なぜ仇となる国の、よりにもよって直接手を下した軍人の妻になる
うなどと思ったのだ。

選択の余地はあった。

もう一方の選択
死と比べたらまだ、ましだとも思った
から？

秀梅は小さく呻き声をあげると、よろよろと立ちあがり躊躇することなく冷たい清水の湧く池に足を入れた。身を屈めて腰まで水に浸かっている。

腹を冷やしたり、衝撃を与えてはいけない。

今まで妊娠などに縁が無い郭玄偉のような男でも知識としてそれくらいはわかる。

墮胎にまともな方法など無い。もしもそれを望むなら、してはいけないことの逆をするしかない。

「そんなに俺の子供を産むのが嫌か」

郭玄偉に見られていたなどとは思ってもいなかったのか、秀梅は弾かれたように声の方へ顔を向けた。

しかし郭玄偉と目が合うと、何かを堪えるように、呟いた。

「……違います」

「何が違う」

言葉ではなく行動が示すものは事実としては揺るがない。

郭玄偉は大きいため息を吐くと、大股で秀梅に近づき手を伸ばした。秀梅はその手から逃れるように身を掬ったが、そんなものは何の抵抗にもならない。

強引に腕を掴み冷たい池から引きずり出し、濡れた寝巻を肌に張り付かせた秀梅を上着で包むとそのまま肩に担ぎあげる。

「嫌っ……！！」

じたばたと手足を動かして、秀梅は初めて抵抗した。

しかし嫌だと言っても拒んでも止めぬと郭玄偉はすでに宣言している。

今更何を言うのか。

「お前には俺の子を産む義務がある」

結婚した女には等しく課される義務。

果たされなければ女として最も不名誉な石女いしめの烙印が押される。

郭玄偉の妻となったからには、秀梅も負う、義務。

仇の子を産むという約束をしたから、秀梅は今生かされているのだ。

「どんなに抵抗しても、俺の妻はお前だ。諦めろ」

どんなに郭玄偉が憎くても、気に入らなくても、それを選んだのは秀梅だ。

速やかに子を孕んでもらわねばならない。

諦める。その言葉に秀梅は抵抗を止めた。

「……では、殺して下さいませ」

それは郭玄偉の心にくすぶる怒りという炎に油を注ぐが如き一言であつた。

心を殺す 一

「そんなに死にたいか」

胸中に燃え盛る怒りとは裏腹に、声は冷静に言葉を紡いだ。

外側で紅く燃える炎よりも中心近くに蒼く燃える炎の方が温度が高いように頭の芯は冷えていた。

ではなぜ。

何度も脳裏を過った問いを口にしそうになる。

郭玄偉の求める答えなど、返らないとわかっていても。

答えなど、最初からわかっていても。

元々生まれ持った容姿のせいで人から忌み嫌われていた。

幼子には泣き叫ばれ、街を行けば後ろ指さされるような、恐ろしげな姿。

名家の血筋と軍に籍を置き自らの力で得た地位と権力はいくつかの縁談を引き寄せたけれど、

いざ郭玄偉の顔を見ると相手は脱兎の如く逃げ出した。

四六時中顔を合わせるなど御免だと、面と向かって言われたことさえある。

婦女子からは避けるどころか嫌悪されていた郭玄偉ではあったが、一部には逆に彼のような男を好む女もいた。

強く逞しいことに価値を見出す世慣れた商売女や玄人たちである。

しかし郭玄偉が求めるものは人生の伴侶であり、自らの子を産んでくれる存在であって、

彼女たちは決して郭玄偉が望む者とは成り得ない。

人並みの幸せを諦め始めた頃、舞い込んだのが亡国の王女との婚姻であった。

王から下賜された花嫁は美しく、郭玄偉はひと目で彼女を気に入った。

今まで武勲をたてようだなどと思っていたわけではない。

だががむしやらに軍人としての勤めを果たし続けたら結果として勝利がついてきただけなのに

さらに褒美として、諦めていた妻まで手に入れることができるなんて。

あまりの喜びに郭玄偉は浮かれた。

何もかもを失った花嫁に出来る限りのことをしてあげたくて、

衣装も装飾品も金に糸目をつけずに揃えた。屋敷の一部を王女の祖国風に改築までした。

婚礼の儀は滞りなく進みいざ初めての夜を迎え、寝台の上でその肩に触れようと手を伸ばしたその時。

「誰がお前の妻になどなるものか。この醜い赤鬼め」

花嫁は嘲笑うと自らの舌を噛み切って自害した。

郭玄偉の目の前で。止める間も無い一瞬の出来事であった。

そして花嫁が遺した一言は、百戦錬磨の將軍郭玄偉に癒えぬ傷を残した。

主であり、花嫁を郭玄偉に与えた真国王は何も言わなかった。

ただ代わりというようにまた亡国の王女との縁談を持ちかけた。

2人目の花嫁は、婚礼の儀式の直前顔を合わせた郭玄偉の目の前で

自らの髪を飾っていた簪で喉を突いて死んだ。
呪いのような捨て台詞は無かったが、血の朱に染まった花嫁を忘れることはどうしてもできない。

花嫁殺しの赤鬼。

口の悪い連中は郭玄偉をそう揶揄した。

郭玄偉が手を下したわけではなくとも、王から賜った花嫁を死なせてしまったのは紛れもない事実。

それに尾ひれがたつぷりについて様々な場所へと流れて行くのは誰にも止められない。

もしも生涯を共に過ごしてくれる人が現れたなら、何よりも大切に
する。

慈しみ惜しげもなく与えて、守ろう。そう、心に決めていた。

しかし裏切るのはいつも女の方だ。

秀梅は問いかけに僅かに頷いたようだった。

郭玄偉は抵抗を止めた秀梅を抱えて寝室に戻ると、先ほどまで共に眠っていた寝台にその身体を投げ出した。

小さな悲鳴をあげて、秀梅の身体は敷布の下にたつぷりと詰められた綿に沈む。

その身体を組み敷きながら、郭玄偉は告げてやる。

「なら殺してやろう」

お前の望み通りに」

心を殺す 一（後書き）

郭さん…。女運無いなー。

心を殺す 二

秀梅はじつと郭玄偉を見つめたまま震えていた。

殺して下さいませ

やっと伝えられた言葉。

ずっとずっと、死んでしまいたかった。やっとその願いが叶うかもしれないのに、

どうしてこんなに自分は震えているのだろう。

押さえつけられた両の腕はどんなに力をこめてもぴくりとも動かない。

下半身は郭玄偉の身体そのもので寝台に縫い付けられ、

濡れた寝巻が肌に張り付いて足の動きを妨げている。

音が鳴りそうな程震える秀梅の姿が可笑しいのか、郭玄偉は喉の奥で低く笑った。

「俺が怖いか」

怖いといえば、怖いかもしれない。

しかしこの震えの元は郭玄偉への、自分の命綱を握る者への恐怖ではない。

切望していた願いがようやく叶うかもしれないというのに、それを嫌だと身体が言っている。

そのことが堪らなく怖いのだ。

「どうやって死にたい？」

秀梅の身体に馬乗りになり互いの鼻が触れ合うほどに顔を近づける

と、

嘲笑を浮かべ郭玄偉は問いかける。

「……喉を食いちぎってやろうか」

ぬるりと生暖かいものが秀梅の喉をなぞり、軽く歯が当てられる。

「それとも縊り殺そうか」

秀梅の手首を掴んだままに、首筋を指の腹で撫でられる。

ぞくり、と背筋を這い上がる寒気に似た何かに、秀梅は息を呑んだ。秀梅の様子にまた、郭玄偉は喉の奥を鳴らすようにくつくつと笑う。

「……幾つだろうが慣れてなかるうが女だなあ」

ふいに手首の拘束が解かれ顎をわしづかみにされた。

郭玄偉と秀梅の視線が、ぶつかる。燃え盛る業火のような瞳に秀梅は囚われる。

震えは止まらない。息をするのさえ覚束無い。

にやり、と口元を歪めて晒うと、郭玄偉は秀梅の寝巻の裾を勢いよく肌蹴させた。

「望み通り殺してやろう……まずはその心から」

女だからこそ味わう苦痛。

たっぷりと身体に刻んでやろう。心を喪うまで。

その心から。

茫然と言葉の意味を考えようとした時、秀梅の唇は郭玄偉によって塞がれていた。

心を殺す 二（後書き）

この続きはムーンライトノベルズで。

読まなくてもストーリーに全く支障はございません。

心を殺す 三（前書き）

直接的な表現はありませんが、女性に対する暴行の描写があります。
ご注意下さい。

心を殺す 三

本来ならば男女の情愛を交わすための行為は、氣遣いや優しさや思いやり、

そういったものが一切排除されてしまえば暴力以外の何物でもない。郭玄偉は思うさまに秀梅の身体を貪り傷つけた。

与えられる痛み泣き叫び、仕舞いには何も考えられなくなった秀梅はぼんやりと死を意識した。

痛みを引きずられたためか、死への恐怖からくる震えはいつの間にか治まっていた。

目の前にあった郭玄偉の顔に浮かんでいた表情の全てがそぎ落とされた時、

永遠に続くかと思われた苦痛だけの行為は、唐突に終わった。身を引き裂かんばかりに苛んでいた熱が離れていく。

ああ、これでやっと終わるのだ。

朦朧とする意識の中、しかしひとつ、ただひとつだけが深く沈んでいこうとする秀梅の心を繋ぎとめていた。

このまま死ぬのなら、言わなくてはならないことがある。

本当なら殺してくれと請う前に、それを口にしなければいけなかった。

夫となってくれた人に伝えなくてはいけないことが、あった。

「……っ」

掠れた声に、激情の名残りを持て余していた郭玄偉は秀梅に意識を

戻した。

「……なんだ、まだ喋る余裕があったか」

郭玄偉は秀梅を粉々に砕いたつもりであった。明確な意思を持って傷つけた。

戦で敵の首を刎ねるために刃を振り下ろすように。

秀梅の瞳は虚ろな光を帯び、顔は涙と血と涎にまみれ、頬は白く、手足は動かない。

それは戦場に生きる者として悲しいほどよく見る逃げ遅れた女の末路の様によく似ていた。

だから声など出す余裕があるとは思わなかったのである。

「……がとう」

絞り出された声は呻きなどではなく確かに何か意味のある言葉のようであった。

無性に苛つき、郭玄偉は秀梅の寝巻の襟元を掴んで引き寄せ睨め付けた。

「何が言いたい」

思い出すのは舌を噛んで死んだ最初の花嫁の呪詛のような言葉。

しかし秀梅の口から零れ落ちた言葉は罵りでも呪いの言葉でもなかった。

「……ありがとう」

「わ、私を、妻、として迎えてくれて、ありがとう……」

何に。

一体何を感謝しているのだ。

「私、は、子供を持つ資格、無いっ……から妻としては役立たずだから……」

「何を言っている。何を！」

秀梅の言葉の意味が郭玄偉には全く理解できなかった。
呟くような感謝の言葉は秀梅の状況には全く当てはまらない。

何故、死との二択で用意された婚姻に感謝などする。

何故、子供を持つ資格が無いなどと言う。

何故。

郭玄偉は訳が判らないその感情のままに、掴んだままの襟元を揺さぶる。

「秀梅！」

やっと言えた。それでもう、思い残すことは無い。

しかし秀梅は郭玄偉の問いには答えず、ただ微かな笑みを浮かべたまま、
痛みの導くままに意識を手放した。

願うもの失うもの ―

穢れた子。

罪の子。

それが私の本当の名前。

でも聞こえる。

だあれ？ 私のもう一つの名前を呼ぶのは、だあれ？

ざらり、と頬を撫でる硬い感触に、秀梅の闇に沈んでいた意識は引き戻された。

「……気がついたか」

声の方向へ視線を動かすと、眉を曇らせた郭玄偉がいた。

秀梅が横たわっている寝台に腰かけ片方の足をだらりと投げ出し、もう片方の足を折り曲げ膝に頬杖をついてこちらを向いている。自分へ向かって伸ばされていた手に、秀梅は身を硬くした。

「もう何もせん」

秀梅の反応に郭玄偉は目を伏せ伸ばした掌を何度か握ったり開いたりさせた。

まるで何か迷うように。そして大きく息を吐くと手を自らの方へと戻す。

意識がはつきりとして来れば、思い出されるのは先の暴力と同意である行為。

しかし今対峙している郭玄偉の業火のようなあの瞳の色はすっかり消え失せ、

秀梅を貪った男と同じだとは思えない程、静かにこちらを見ていた。互いの視線が混じり合う。

郭玄偉の凪いだ瞳の色に秀梅は不思議と手を伸ばされた時に感じた恐怖は消えていった。

視線だけでなく郭玄偉に向き直ろうと身体を動かすと腹に激痛が走る。

「っ……！」

声を上げることすら出来ない程の痛み。

「無理に動くな。しばらく座ることもできんだろう。そのまま寝ていろ」

優しい手つきで掛布の乱れを直されて、初めて秀梅は自分が気を失う前と違うことに気づいた。

まず寝巻が濡れていない。涙や汗で汚れていただろう顔も身体も綺麗になっている。

忙しげに目線だけで周囲を窺えば寝台の敷布も掛布も今しがた整えられたように皺も汚れも見当たらない。

「……だ、誰が」

秀梅の身体を清め着替えさせ、寝台を整えてくれたのか。

臨国から連れてくることを許された2人の侍女にしか、秀梅は自分の世話を許していない。

常であればこの2人以外には考えられないが、今日の前にいるのは郭玄偉のみ。

「今日は呼ばねば誰もここには来ない」

仮にも初夜である。邪魔する者はさすがにいない。

「では…」

郭玄偉が世話をしてくれたのか。

問いかけの答えは婉曲な肯定。

秀梅は全身から血の気が引いていくのがわかった。

「子供を持つ資格が無いというのは、衣を脱ぎたくない理由が関わっているのだろう」

知られなくなかった。

形だけでも夫となってくれたこの人には。

「……ご覧になりましたか」

「ああ」

ふいに手が伸びてくる。大きな掌が柔らかな秀梅の栗色の髪を梳き、撫ぜる。

慰めるように触れる手に、秀梅は戸惑ったが、嫌ではなかった。

こちらを見つめる郭玄偉の表情は何かを堪えるかのように歪んでいる。

どうして。

痛いのは私のなのに。傷つけられたのも私なのに。
どうしてこの人はこんなに辛そうな顔をしているのだろう。
どうして私はこの人の手を受け入れているのだろう。

「どうして」

問いは自然と口から零れ落ちた。

しかし今度は答えて貰えなかった。

郭玄偉は掌を滑らせ秀梅の頬を撫でる。ざらり、とささくれた硬い
感触が頬を包んだ。
逆に問い返される。

「……俺は。秀梅、お前の望みを適えられたか」

意識を失う直前に告げられた秀梅の感謝の言葉は、郭玄偉を混乱と
いう渦の中に叩き込んだ。

なぜ、ありがとうなどという言葉が出てくるのか。
なぜ、子供を持つ資格が無いのか。

秀梅の夫に相応しくないのは外見、年齢、身分、全てをもつてして
も条件の劣る郭玄偉の方。

秀梅にとって郭玄偉との婚姻は失うものばかりで得るものは数える
程しかない。

しかしその数少ない得るものであった己の命すら、秀梅はいらない
と言う。

ではなぜ。

堂々巡りの問いの答えは秀梅しか知らない。
しかし夫たる郭玄偉は気付いたのだろう。

「……はい。だから、あとは私が死ねば終わりなのです」

願うもの失うもの 二

意識を失った秀梅の姿に、郭玄偉の怒りは急速に収まっていった。それと同時に湧いてきたのは強烈な罪悪感であった。

抵抗する術を持たない者、特に女に暴行を加えることは真国軍に属する者として

最も嫌悪すべき事であり、処罰の対象である。
その償いは処刑、すなわち死。

相手は自分の所有する妻であるから、郭玄偉の行為そのものは罪にはならない。

妻には夫を受け入れる義務が存在するからである。

しかし人に知れば何と言われるだろう。決して褒められたものではない。

十歳以上年下の女の行動が、言葉が、気に入らなかったからとはいえ、自分は何をした？

郭玄偉は頭を掻き毟る。

自分の感情のままに、傷つけ、痛めつけた。

知りたいならば、拘るのならば、面と向かって聞けばよかったのだ。どうして仇の妻となることを了承したのか。

どうして宿つてもいない子供を殺そうとしたのか。

悶々とただ心に抱えているだけでは、何もわからない。

仰向けに寝台に横たわった秀梅の乳白色の肌はまるで白磁のように血の気を失っている。

顔に掌をかざすと、呼吸は確認できた。

首筋を探り脈を測るが、心の蔵は規則正しく動いている。

今命がどうにかなるといふ状態ではない。

蛆の湧いた腐りかけた傷や血の拭き出る様が常に目に入るような環境にいた。

常人であれば精神を狂わせるような場所にもいた。

しかし秀梅の様は今までのどんな記憶よりも経験よりも郭玄偉を混乱させた。

その姿は2度も花嫁を失っている郭玄偉にとっては最悪を想像させるには十分であつたから。

とにかく傷を治療して、汚れた寝巻を着替えさせねばならない。

濡れた寝巻を体温を奪う。さらに寝台は郭玄偉の汗や秀梅の涙、それと血に汚れている。

傷ついた者を休ませるのには流石に適していない。

固く結ばれた帯を解くと寝巻の合わせから肉付きの薄い腹が覗いた。腹には大きく赤紫色の痣がくつきりと浮かび上がっている。

痣から目を逸らすように、郭玄偉は秀梅の寝巻の合わせを開いた。

郭玄偉の眼前に晒された秀梅の裸体には、ありえないものがあつた。それは郭玄偉にとっては日常的に目にするものであり、すでに己の一部であるもの。

しかし仮にも一国の王女であつた秀梅には最も相応しくないもの。

右肩から胸の下までを覆う赤黒い染みのような痣。

そして痣をさらに覆い隠すように無数の傷跡が、

秀梅の上半身に刻まれていたのである。

郭玄偉にはその傷がどうやってつけられたものかすぐに察しがついてしまった。

戦場でつけられた郭玄偉のそれとは明らかに違う。

郭玄偉自身が持つ傷跡で、一番多いのは刀傷だ。次いで矢傷。すなわち刃、武器によってつけられたもの。

しかし秀梅の身体に一番多いのは引き攣れた蚯蚓腫れの跡。これは恐らく鞭打たれた跡であろう。

身をそつと起こし、背中を確認すればそこにも痣と傷跡。

僅かに盛り上がり、つるりとした張り付いたような傷は火傷によるもの。

ああ、そうか。

堂々巡りの問いの答えが、今目の前にあった。

望んでいたのは、得ることではなく、失うこと。

秀梅は王女という身分を捨てるために、郭玄偉との婚姻を承諾したのだ。

傷物の王女としてではなく、只の女として死ぬために。

願うもの失うもの 三

郭玄偉のささくれだった掌は秀梅の柔らかな頬を時折ざらりと引っ搔いた。

しかしその動きは限りなく優しくかった。

労わるように、慰めるように、秀梅の心までも包んだ。

初めての行為は苦痛を伴った。二度目は暴力と変わらなかった。しかし眠りについた秀梅を抱きしめてくれた郭玄偉の温もりは、今頬を撫でる掌は優しい。

「……どうか、どうか殺して下さいませ」

誰もが死に向かって今を生きている。

人間という言葉が表すように人である間何かを成しながら。

しかし秀梅にはその何かを成す資格が無いのだ。

ならばこの生に、何の意味もありはしない。

生まれながらに持つ痣は前世の罪の証だという。

罪人は一生犯した罪を忘れないように、焼印や刺青を施される。

身に刻み込まれたものは死した後でさえ、罪の存在を主張し続けるのだ。

秀梅が罪を背負った穢れた子とされながら今まで生きながらえることが出来たのは、

臨国の正妃から生まれた唯一の子供であつたからである。

側妃の腹から生まれていたならば、即刻処分されていた。

産みの母である臨国正妃はもちろん罪を背負った我が子を愛さなか

った。

折りに触れ口汚く罵られ、侍女を罰するための鞭で打たれ、熱い茶を浴びせられ、

まるで痣を隠すように傷つけられた。

しかしどんなに酷い仕打ちを受けようが秀梅は母を恨んだりはいなかった。

虐げられ、蔑まれて当然であつたから。

生まれた時に定められた運命には誰も逆らえない。

王も奴隷も誰を母として、どこに、どのようにして生まれるかで全てが決まるのだ。

ただ母は衣で隠すことのできない顔や手は傷つけようとしなかった。それだけが母から受け取ることを許された情であつたと秀梅は思っている。

「秀梅」

低く穏やかな声が、秀梅の名を呼ぶ。臨国^{そこく}では秀梅という名では呼ばれなかった。

ただあの罪の子、穢れた子、とだけ。

こうして名を呼んでくれる人が夫となってくれて、最期を見てくれるのなら秀梅に最早悔いなど無かつた。

「はい」

しかし呼びかけに応えるように視線を向ければ、穏やかであつたはずの郭玄偉の瞳には別の色が浮かんでいた。それは、寝台に投げ出されたあの時。二度目の行為の時に見せた業火によく似ていた。

どうして郭玄偉がそんな瞳をするのか、秀梅には解らなかった。黙って死なせてくれれば、郭玄偉は傷付かなかったはず。ずっと隠し通すつもりであった、秘めた傷を暴いたのは郭玄偉である。

しかし黒い焰に似た燃える瞳とは裏腹に、郭玄偉の顔には苦悶の表情が浮かんでいた。

何かを言いかけて、それを飲むこみ、ため息と共に吐き出す。それを幾度か繰り返した後ようやく、郭玄偉は口を開いた。

「……俺ならば、殺してくれると、思ったか」

秀梅はその問いに答えることが出来ない。すでに、答えは口に出した後であるからだ。

「……俺の子供を殺し続ければ、死ねるとでも思ったか」

王族にとって自ら命を絶つことは、罪だ。だが生まれる前の子供の命は母親のものであるから、罪にはならない。

どうせ穢れた自分から生まれても、また罪を背負った子が生まれるだけ。

蔑まれ、虐げられるのは、自分ひとりで、じゅうぶん。

だから、子供は産めない。その資格は無い。

そして不生子ふせいこを妻に持っていて何の意味も無い。

秀梅のように子供を産むということを条件として生きながらえている身の上であれば尚更、遠からぬ将来望むとおりに死は与えられたはずであった。

互いの望み ―

「……はい」

郭玄偉の黒い炎を宿した瞳は口を嚙み続けることを許さぬ力があつた。

秀梅はその瞳から視線を外し答えた。

誰にも知られず悟られず、自らの意思では脱ぐことのできない王女という衣を脱ぎ、死ぬこと。

それが秀梅の物心ついた頃からの願い。

前世の罪を背負って生まれた穢れた子の望み。

なのにどうしてこんなに疾しいような、後ろめたいような気分になるのだろう。

ずっとずっと祈るように願いつけてきたのに。

「……どうやらお前は何か勘違いしているようだ」

頬を包んでいた掌が顎にかかり、顔を引き上げられる。

もう視線をそらすことはできない。あの燃える瞳が、秀梅を容赦なく見下ろしている。

「俺は軍人だ。そして処刑人でもない。」

どちらか人を殺すことを生業としているが、軍人がその刃で人を殺めることができるのは戦場において相手の同じ立場である者のみであり、処刑人が命を奪うのは裁判で死刑判決を受けた罪人だけである。

どちらの場合も職を遂行するための手段としてのみ認められているのであって、誰彼かまわずに殺しているわけではない。

眼差しとは裏腹に、郭玄偉はゆっくりと幼子を諭すように、告げる。

だからお前を殺す理由などないと。

「でつても、私は傷物です！ 結婚するのに相応しい女ではございません！」

醜い傷と痣があることを隠して結婚した。それは重罪のはずだ。

離縁されるだけで済むならばまだいい、夫側にどんな扱いをされても妻側は文句が言えない程の罪のはず。

なぜなら傷物と結婚したという事実だけで、夫は周囲から嘲笑を受けることになるからである。

王族や貴族など、名誉をことさら重視する者たちにとっては命で贖うほどの罪。

故に秀梅は傷を隠し、不生女うまずめであるという理由で死ぬつもりだったのだ。

子が産めないということとは女として生まれたものにとって最も不名誉なことであったが、夫たる男に責は無い。蔑まれ忌み嫌われ地に落ちるのは秀梅の名だけのはずだった。

「お前の傷は、臨国では罪であったのかもしれないが、真国しんこくでは違う」

郭玄偉は自らの大きな鼻を横切るようについた傷をつい、と親指の腹でなぞる。

皮が千切られ、引き攣れ盛り上がった傷跡。

自虐的な呟きは口から零れおちた。

「お前の理屈でいけば、俺のこの傷は、罪の証か」

「……ついいえ」

郭玄偉の傷は国のために戦う者として当然のもので、罪どころか勲章と言えるはずだ。

醜い自分の痣や傷と同じものではない。

しかし黒い焰を宿した瞳と共に郭玄偉の顔に浮かぶ苦悶の表情は消えない。

何かに耐えるように、何かを憎むように。

ゆつくりと目の前の郭玄偉が近づいてきた。

互いに目を見開いたまま、口づける。

奪うように貪られた最初のそれとは違う、ただ触れるだけの。それが離れて行くとき、呟きがまた、零れおちた。

「俺と結婚することは、そんなに嫌だったか」

「違いますっ……!!」

秀梅は傷物の名ばかりの王女だ。子供を持つ資格すらない女。悪いのは、自分だけ。

その凝り固まった感情が、秀梅に郭玄偉の言葉を否定させた。

「俺の子どもを産むのは、罪か」

そこまで言われてようやく秀梅は目を背けていた郭玄偉の瞳の焰に感じた疾しい気持ちの理由をはっきりと自覚した。

戦場では西の赤鬼のふたつ名を背負う、万の軍を率いる西の大国真

国最年少將軍。

この人ならば、役立たずの自分を殺してくれるはずだと、ただそれだけで婚姻を承諾した。

臨秀梅という王女の身に刻まれた罪を隠して。

秀梅は郭玄偉を利用したのである。

その手を汚してもらったために、殺してもらったために、自分の望みを、叶えるためだけに。

互いの望み 二

そんなつもりじゃなかった。

郭玄偉を傷つけるなど、なかった。
傷付くのは秀梅だけのはずだった。

秀梅は自分が郭玄偉の心情を微塵程も考えなかったことに愕然とした。

郭玄偉は、秀梅の気持ちを確かめるように何度も同じ問いを口にしていたというのに。

俺と結婚するのは、嫌か。

俺の子供を産むのは、嫌か。

郭玄偉はずっと秀梅の気持ちだけを気にしていた。
問いを裏返せば、彼の思いはすぐに察しがつくのに。

俺と結婚してくれるのか。

俺の子供を産んでくれるのか。

輝かしい実績に裏付けされた真国最年少將軍という面の下に隠された、

郭玄偉の本当の望み。

「ち、がう、違う……」

「何が違う？」

先ほどと同じ否定の言葉は、間髪入れずに返された。

「俺の子供を産むのが嫌なのだろう」

そうではない。

あなたの子供を産むのが嫌なのではない。

わたしは子供を産むことができないだけ。

しかしそれは郭玄偉からしてみれば、全く同じ意味である。

どんなに言葉を尽くして説明してもおそらく郭玄偉には伝わらない。

郭玄偉は秀梅を否定しなかった。

刻まれた傷を、生まれながらに持つ痣を、蔑んだりもしなかった。

秀梅の背負うものを知って尚、妻だと言ってくれた。

郭玄偉が秀梅に対して愛情を持つてくれているわけではないだろう。

昨日初めて顔を合わせた同士、そんなものが湧くはずもない。

しかし郭玄偉は受け入れた。

秀梅を妻だと、はっきりと認めた。

それをわかった上で、秀梅は郭玄偉に殺してくれと頼んだのだ。

あまりに身勝手な、感謝と共に。

秀梅は肉体的にも精神的にも傷つけられることに慣れていた。

どれほどの苦痛を伴うか、正に身を持って知っていた。

しかし己の望みを叶えるためだけに、秀梅は郭玄偉を利用し、傷つけた。

自分はこんなにも利己的な人間であっただろうか。

誰かを傷つけるということは、自分をも切り裂くことなのだ。

やっと秀梅は気づいた。

今まで誰も教えてくれず傷つけられてばかりで知る術はなかったと

はいえ、

誰かを傷つけて初めて、気づくなんて。

目の前にいる、傷だらけの男は、静かに黒い焰を瞳に燃やし続けている。

湧きあがる感情に顔を歪めながら。

それが表すものは、怒りと……悲しみ。

取り返しのつかないことをした。

知らず秀梅の身体が、震えだした。

身体が揺れるのは、幼い頃から泣くことも言葉を発することも許されなかった秀梅の

唯一といっていい感情の発露であった。

どうしたら目の前の相手を鎮めることができるだろう。

どうしたら許してもらえるのだろう。

今までどんなに許しを乞うても与えられたことの無い秀梅には、わからなかった。

ただ二人は見つめ合った。

互いに言葉では心の中を語ることはできなかったから。

まるで膠で張り付けられたように視線だけは、ぴつたりと合った。

ふいに、郭玄偉が秀梅の顎を掴んでいた手を離した。

そのまま身を翻し、寝台から降りる。

秀梅に背を向け、郭玄偉は呟いた。

「俺はお前を望まぬ。だからお前の望みも聞かぬ」

腹の底から、絞り出すような、声であった。

「……………ここに在れ」

互いの望み 三

ここに在れ。

そう告げるのが、精一杯であった。

脅え震える、自らが穢した少女に背を向けて、郭玄偉は瞼を閉じた。もう秀梅の栗色の澄んだ瞳に浮かぶ恐怖を見ていられなかったから。

愚かで、そしてあまりにも無様だ。

秀梅が、ではない。郭玄偉自身が、である。

何に失望している？

答えに何を望んでいた？

どうして郭玄偉との婚姻を承諾したのか。堂々巡りの問いの答えはすでに示された。

失うために、死ぬために。

自らを傷つけるために。

秀梅は郭玄偉の妻となった。

剣を振るい弓を引き人を殺し破壊するしか能の無い自分には相応しい役目ではあったな。

郭玄偉は自嘲気味に心の中で呟いた。

もしかしたら。

ほんの僅かな、期待。

もしかしたら。

求めてもらえたのかもしれないと。

望むものはいつもただひとつ。ただひとり。

生涯を共にしてくれる存在。

慈しみ慰め尊ぶべき存在。

愚かな、望み。

「……ここに、在れと」

郭玄偉の背中に、震える声が投げ掛けられた。

「……お前は俺の妻だろう。それだけは、覆らぬ。諦める」

例え秀梅の心と希望が別にあっても、それだけは譲れなかった。

そもそもこの婚姻は郭玄偉の自由になる事柄ではなかったし、

郭玄偉としても三人目の花嫁まで失いたくは無かった。

しかし身分を失うという秀梅の望みの半分は叶えられてしまった。

命を失うという残りの半分は、どうしても叶えられない。叶えたくない。

「ただもうお前には指一本触れぬ。何もせぬ。

この屋敷の中でなら、今までと変わらぬ生活を約束する」

まるで懇願するように、言い募る。

「好きに暮らせ。宝石でも、衣でも、なんだって取り寄せてやろう」

死以外なら、なんでも望むがままに。

実際、郭玄偉にはその言葉を実行するだけの権力も財産もある。もともと不自由な暮らしをさせるつもりは毛頭なかった。

郭玄偉の妻となり、この屋敷にいるということが全ての自由を奪っているのと同じだからだ。

郭玄偉は大きくため息を吐くと、背を向けたまま寝台の上に置いてあつた剣を掴もうとした。

それは全く無意識の行動だった。

郭玄偉にとって剣は身体の一部とも言っていていいものであつたから、自然に目と手がそれを探すのだ。
特に、不安なときは。

しかし触れたのは手に馴染んだ柄や鞘ではなく、柔らかな手であつた。

その感触に弾かれたように振り向けば、秀梅がいつの間にか寝台に横たえていた身体を起こし剣を掴んでいる様が目に入る。

王女が剣を手にしようとする理由など、ただひとつしか無い。

一瞬のうちに静まりかけていた怒りがまた、郭玄偉を支配しそうになる。

だがほんの一時前に見た、白磁のように血の気を失った秀梅の姿が僅かに残った理性を動かし、それを押し止めた。

剣を掴む秀梅の手を上から覆うように握ると、今だ小さく震えているのがわかる。

「……何を、している」

発した郭玄偉の声は、秀梅と同じように小さく震えていた。

約束 一

骨のきしむ音が聞こえそうなほど強く手を握られて、秀梅は顔を歪ませた。

「答えろ」

しかし秀梅には答えようがなかった。
なぜ剣に手を伸ばしたのかが自分でもわからないからである。

婚礼の儀式の間も、宴の席でも、部屋を抜け出した秀梅を追って来た時も郭玄偉は剣を手放さなかった。

その様子から常に携帯しているのであろうことは容易に察しがついた。

ならば彼が剣を手にするということは、この場所から去ろうとしているということ。

郭玄偉が背を向けたまま剣に手を伸ばした時、とつさに思ったのは「嫌だ」という感情。

何がどう嫌なのかはわからない。

郭玄偉がここからいなくなるかもしれないということが嫌だったのか。

身動きするだけで痛む身体は、不思議なほど俊敏に動き、郭玄偉よりも先に剣を掴んでいた。

「……俺が殺さぬから自分で死ぬつもりになってもなったか」

今更馬鹿なことを。

吐き捨てるような呟きの後、また握られた手に力が加わる。

秀梅の手は厚く大きい郭玄偉の手によって肌は血の色から紫色に変化していた。

このまま骨も肉も碎かれ握りつぶされるのではないか。痛みは心の奥からまた恐怖を引きずり出そうとした。しかし秀梅はそれを振り払うように叫んだ。

「違う！」

「じゃあ何故だ！」

寝台にあつた剣ごと手を引かれ、ねじり上げられる。

あまりの痛みに、言葉にならない悲鳴が秀梅の口から零れた。全身の血がねじりあげられている手に集まっているかのように熱く、痛い。

じつとりとした汗が背中を伝うのがわかる。

苦痛を耐えるために固く瞑られていた目を開ければ、真っ直ぐに郭玄偉は秀梅を見つめていた。

その瞳に宿る焰は黒く激しく燃え盛っている。

「あ、あなたが、いなく、なると、思つて」

駄目だ、こんな言い方では、郭玄偉には通じない。

上手く言葉を紡げぬ苛立ちが、また秀梅を焦らせる。

「剣が、剣を、持っていくつ、のはいなく、なるから」

「わた、しを、置いて、いな、くなってしまうから」

言葉を覚えたての幼子のように、たどたどしく一言一言を伝える。

言わなくてはいけない。伝えなくてはいけない。

秀梅を妻だと認め、ここに在れと言ってくれた、夫へ。

今までどんなに願っても求めても得られなかった答えをくれた彼へ。

「もう、し、なないから、ころ、してなんて、いわないっ、から」

だから。

「い、かない、で。そ、したら、わた、しはどこ、にも、いかない、から」

ずっとここにいるから。

あなたのそばにいるから。

痛みのためか、心の内を晒したためか、自然と栗色の瞳からは涙が溢れた。

肝心な時にはいつも揺れていたその身体は、なぜか鎮まっていた。

この穢れた命に価値があるというのなら、差し出そう。

どうせ捨てるはずだったもののだから。

黒い焰の揺れる瞳を見つめ、秀梅は伝えた。

郭玄偉がずっと傍にいてくれるのなら、妻として認めて共に在ってくれるのなら、

同じだけを、返すことを。

死に救いを求めないと。

約束 二

まるで操る糸が切れたように唐突に、秀梅の手を掴む力が抜けた。滑り落ちるように拘束が解かれた手と剣は寝台の上に吸い込まれるように落ちる。

あまりの痛みに秀梅は掴まれていなかった方の手を変色した手に添えて唸った。

辛うじて手はその形を保ってはいたが、変色した様は容易には回復しない。

蹲るように手を庇う秀梅の姿を郭玄偉はただ茫然と見ていた。

今聞こえた言葉が信じられなかったから。

脳裏を過るのは呪詛のような、花嫁の言葉。

誰がお前の妻になどなるものか。この醜い赤鬼め

嘲笑う血まみれの女の記憶。

秀梅がたった今発した言葉は、郭玄偉が願って止まない只一つの望み。

やっと、それも自分の妻となった者が叶えてくれた望みなのになぜこんな気分になるのだろう。

願い続けながら諦めたくてたまらなかった。

でも自分を好いてくれる婀娜な玄人女をいくら侍らせてもそれでいいと満足出来なかった。

欲しいのは欲しいのは欲しいのは。

「だ、んなさま」

郭玄偉の錯乱する思考を現実に取り戻したのは、秀梅の呼びかけであつた。

秀梅がその言葉を使ったのは、名前で呼ぶのは不敬であつたから、違う呼び方を使ったただけだ。

夫に呼びかけるのだから、ただ旦那様、と。

「お前は、そう呼んでくれるのか」

自分の伴侶だと、認めてくれるのか。

郭玄偉の言葉に、秀梅は微笑んだ。

「私は、あなたの、妻です」

そして迷いなく、震えることなく、郭玄偉に告げた。

「覆らぬ、と、仰いましたでしょう？」

だから私は、あなたの妻です。これから、ずっと」

秀梅の笑顔を、郭玄偉は初めて目にした。

透明で、穏やかで、慈愛に満ちたそれこそが、郭玄偉の望みであつた。

「……約束を、やぶつてもよいか？」

「約束とは？」

「お前にもう指一本も触れぬと言っただろう」

初めて会ったのは昨日だ。

だがその僅かな間に一体郭玄偉は秀梅を何度傷つけたのだろう。だから確かめなくては気が済まなかった。

困惑しながら確認してきた郭玄偉が可笑しくて、秀梅にまた笑顔が浮かぶ。

この人は大陸の半分を掌握する大国真の將軍なのに。何も怖いものなど無いはずなのに。

傷つけてしまった妻に触れることを躊躇うような、人なのだ。

「はい、そんな約束、私は忘れました」

答えて秀梅から手を伸ばす。

郭玄偉のささくれた、厚く大きな手がそれに触れ、優しく握られた。

こうして二人は夫婦になった。

約束 二（後書き）

秀梅が真国王に忠誠の証を見せることが出来なかった理由はお分かりいただけましたでしょうか？

二人の始まりの物語はこれにて完結。
ただどちよつとしたお話を後少しだけ。

夜が明けて

「……昨夜は何があつたのですか」

郭玄偉の屋敷の全てを取り仕切る侍女頭の山柳がにっこりとほほ笑みながら言った。

口角は間違はなく笑みを作っているというのに、その目はちっとも笑っていない。

山柳は元々郭玄偉の乳母であり、まさしく生まれた時からの長い付き合いである。

彼女がこんな顔をするときは、郭玄偉が何かまずいことをやらかしてしまつた時なのだ。

国一番の將軍と言われる郭玄偉の全く頭が上がらない人物は主である真国王と母親代わりの山柳二人だけ。

「別に、何もありません」

身に覚えと言えば昨夜の出来事ではあるが、新婚初夜の出来事はよほどのことでなければ侍女たち家人は知らないふりをするのが慣例である。

以前の花嫁のように秀梅は死んでなどいない。

しかし手酷く傷つけてしまったことを知られれば何を言われるかは想像したくない。

いずれは知られてしまうことではあるが、今日くらいは秀梅をゆつくり休ませてやりたい。

この屋敷の主人としての威厳をかき集めて、郭玄偉は突っぱねた。

「……ではこれはなんでもございましょうねえ」

山柳が取り出したのは血の散った寝巻であつた。

秀梅が昨夜身に着けていたものは今だ誰も立ち入っていない寝室にあるはず。

ではなぜ今山柳の手にあるのか。

思い起こせば秀梅は夜明け前に寝室から抜け出した時、何かを持っていた。

恐らく泉に入ることと考えて着替えを持っていたのであろう。

激昂していた郭玄偉は替えの寝巻の存在になど全く気付いていなかった。

まずい。そんな一瞬の混乱と焦りはあつさり山柳に伝わってしまう。

「泉の近くに置いてありましたわ。ねえ、玄偉様、夜に外で何なすってたんですか？」

しかもまずいことに、寝巻には秀梅の血が付いている。

山柳が郭玄偉を名前で呼ぶのは怒りが最高潮に達した時。

「知らん」

何も知らないと言っしかない。それしか言えない。

その後郭玄偉が新妻の顔を見ることを許されたのは1ヶ月以上経過してからであつた。

夜が明けて（後書き）

女に優しくしない男は最っ低ですからね。
こつてり絞られたことでしょう。
これにて完結。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8050n/>

秀梅の瑕

2010年12月22日00時22分発行